

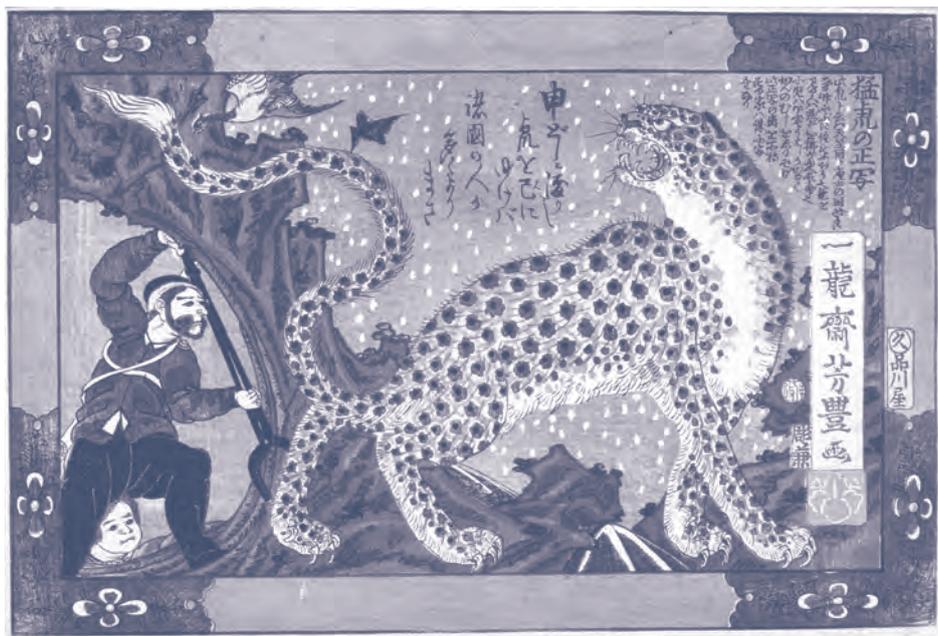
開港のひろば

Number

148

編集・発行／横浜開港資料館
〒231-0021 横浜市中区日本大通3 電話(045)201-2100
ホームページ <http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

発行日／2020年(令和2)7月1日(水)
印刷／中川印刷株式会社



「猛虎の正写」 一龍齋芳豊画 万延元年(1860)7月 当館蔵

特集

幕末の感染症 と横浜

のです。
開港からまもない文久二年(一八六二)、麻疹とコレラが連続して大流行し、横浜と日本社会はおおいに動揺します。とくに、コレラはもともとインドの風土病でしたが、イギリスを中心とする西欧諸国のアジア進出にもなつて日本にも伝わりました。国際社会とのつながりもたらした感染症であり、社会的混乱だったのでした。

この折の横浜のようすは、日本側のほか外国側の史料にも記述があり、またその対処にあたっては外国側との交渉も生じました。この年の感染症の様相をふりかえることは、グローバル化のなかで感染症に立ち向かっている現在の私たちにものなにかしらのヒントをあたえてくれることとでしょう。

ところで、上の資料に描かれる動物は、万延元年(一八六〇)にアジアの国から日本に輸入された豹で、横浜や江戸で見世物となったものです。画のなかには「是を見る人ハ悪魔を拂がゆへ長命也。小児ハほふそ(疱瘡、はしか(麻疹)かるく、かんのむし(疳の虫)をしりぞけ、此正写の画を所持する家ハ誠に安全なり」と書かれています。つまり、この絵は流行病からの守り札でもあったわけです。新型コロナウイルスが無事終息することを祈りつつ、次頁では文久二年の感染症の諸相を見ていきたいと思います。

歴史をふりかえると、社会が強大な感染症に襲われたのはこれがはじめてではありません。中世のヨーロッパはペストの襲来によって人口を大きく減らし、江戸時代の日本は天然痘や麻疹に悩まされました。そして横浜も、開港都市という性格上、海外からもたらされたさまざまな感染症に幾度となく苦しめられてきた

幕末の感染症と横浜

文久二年の麻疹・コレラ

麻疹の流行

文久二年（一八六二）七月、麻疹がはやりはじめていた。麻疹は江戸時代、一〇数年から二〇数年おきに流行したが、この年の麻疹は重症化する患者を少なからず出した（鈴木則子『江戸の流行り病』吉川弘文館、二〇一二年）。江戸では、「七月の半ばに至りては弥蔓延し、良賤男女この病癘に罹らざる家なし」（『増訂武江年表』）というほどの流行をみるようになった。

横浜近郊の村にも麻疹はやってくる。生麦村（現鶴見区）で名主をつとめた関口家の日記に、この年はじめて麻疹の記述があらわれるのは七月七日。「下女等麻疹にて困り候」 「昼後より英太郎熱これあり、相臥し、麻疹にてこれあるべく候由、神奈川大黒屋相頼み候医師、夜に入り駕籠にて来る」と下女と身内が感染し、医者を呼んだことが記されている。二日には「当節麻疹大流行」により働き手が不足し、「末吉屋老母今日より相頼み働かれ候」と、やむなく近所の「老母」に手伝いに来てもらっている（「附込日記帳」（関口日記）当館蔵）。

外国側も麻疹の伝播の実態を把握しようとしていた。八月六日、*The Japan Herald*（当館複製本）は、江戸（四宿を含む）における麻疹の患者・死者を二四地区ごとに記し、その総数を前者五六万七七一三人、後者七万三二五八人と報じた（西暦八

月三〇日付、和暦五月二〇日）七月一六日までの統計。患者・死者数は諸説ある。記者は「この病氣（患者）は今、減少しつつある」と指摘しているから、そのピークは越えていたのだろう。しかし、「もっと危険な」感染症が姿を見せはじめていた。

上海の「コレラの警戒

前年の一八六一年、インドでコレラの流行があった。コレラは「大英帝国によって形づくられたネットワークに沿って」インドから香港に伝わり、香港から一八六二年の春には南京へ、そして上海を経由して夏の盛りには天津に到達した（Ruth Rogaski, *Hygienic Modernity University of California Press*, 2004）。

文久二年の初夏、幕府は上海に官船千歳丸を派遣していたが、その随員もコレラに襲われた。罹患した者の症状はこうである。「胸中煩悶シ飲食ヲ絶ツニ至ル。午（正午）下身体冷カニ腹痛ツヨシ。晡時（午後四時頃）ニ至リ泄痢（下痢）甚ダシ。（中略）夜ニ入り手足拘攣（こわれん）、舌端固縮シ、脈ノ有無弁ジガタシ。医云フ、コレ流行ノコレラナリ」（日比野輝寛「贅脱録」五月一二日付。『幕末明治中国見聞録集成』第一巻、ゆまに書房、一九九七年）。

上海でのコレラ（幕府史料は「痧病」と記す）流行の情報は江戸にも伝わった。外国奉行は「伝染病相煩い候もの乗り組み候船々、万一御開

港場へ繫泊仕り候様の儀これあり候ては、自然御国内へ蔓延仕るべきやも計りがたく」と、横浜・長崎・箱館（函館）の三港に來航する外国船の乗組員から、日本国内に感染症がひろまることを懸念した。そこで中国から渡來する船のうち、「健固状所持致さず候分は御開港場へ繫泊御差し留め」と、健康状態を証明する書類を持たない船の寄港禁止を、七月二日以降各国の公使に通達する（『統通信全覽』編年之部三「米国往復書翰」十一）。

イギリスの代理公使ジョン・ニールは七月一四日、幕府に返書を認め、香港・上海の領事に要望を伝えることを約束。そして、流行病がおさまるところあると

最新情報を老中に伝えた（同編年之部四「英國往復書翰」七）。

幕府はこのことを聞いて少しは安心したかもしれない。

横浜・江戸のコレラ

しかし、コレラは国内に上陸してしまう。横浜に在住していたアメリカ商人のフランシス・ホールは八月六日（西暦八月三〇日）の日記に、「そして今、コレラが（麻疹に）続いている。それはまだ最悪の状況ではないが、しかし、日本人住民のあいだでは日々多くの死者が出てくる。ある家では四人の家人が一人また一人と死んでいった」と開港場付近の状況を記している（F.G. Notehelfer ed., *Japan Through American Eyes* Princeton University Press, 1956）。



図1 茶毘室混雑の図 「安政簡勞痢流行記」金屯道人（仮名垣魯文）編 安政5年（1858）人間文化研究機構国文学研究資料館蔵 安政5年のコレラ流行時、死者が激増して棺桶が焼き場に積まれていく様子を描く。

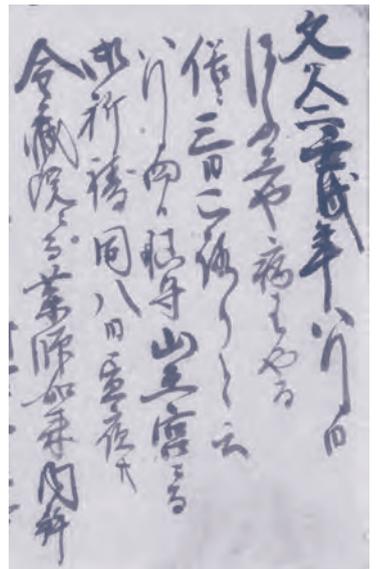


図2 「懷中覚 四番」 文久2年(1862) 8月 堤真和家文書 当館寄託

sity Press, 1992)。

江戸でもコレラが勢いを増していた。The Japan Herald の八月三日(西暦九月六日)の記事では、「コレラは波のようにこの地を襲っている。(中略)江戸の役所では一〇〇の葬列が通り過ぎることに橋を清掃することになっている。日本橋だけは最近一日に四回清められている。(つまり)四〇〇から五〇〇の葬列が日本橋を毎日通過している、と我々は聞かされている」とその死者の多さを伝えた。

コレラは横浜付近の村をも脅かす。磯子村(現磯子区)の村びとがつけた古文書にはコレラの俗名である「ころり」といふ言葉が記録されている。「ほ

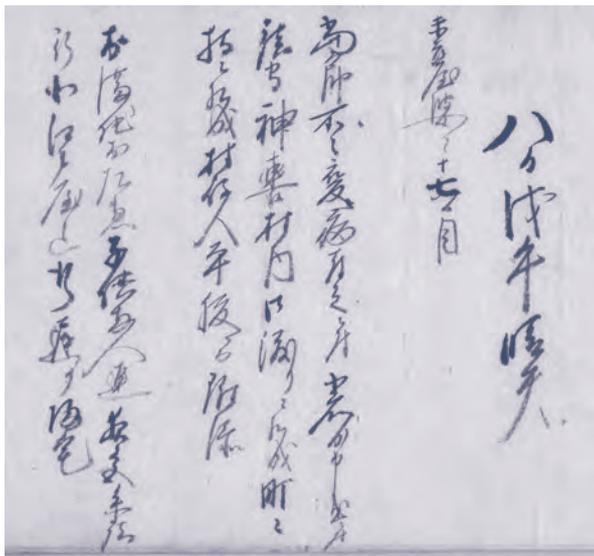


図3 「附込日記帳」(関口日記) 文久2年(1862) 8月8日 当館蔵

ふしや(暴瀉)病はやる、俗三三日ころりと云」「懷中覚 四番」堤真和家文書、当館寄託、図2)。そして、村では感染症の退散を祈って神事がおこなわれた。八月四日、磯子村の「鎮守山王宮にて御祈祷、同八日昼夜共金藏院にて薬師如来内拝」と鎮守の神様に祈りが捧げられ、病気を治す仏である薬師如来を拜むことも許された。同じ日(八日)、生麦村でも「当節所々変病これあるに付き、小前より申し出に付き、鎮守神輿村内御渡りに相成」った。麻疹・コレラといった「変病」の鎮静を願う村びとたちが村役人に要望し、鎮守の神輿が村じゅうを練り歩いたのである(図3)。

医療をめぐる国際協力

コレラが牙をむきはじめていた八

月四日、フランス公使のド・ベルクールは老中に手紙を書き、次のように述べた。「日本の医師と外国の医師と(が)集会して(中略)各々その兼ねて施したる治療上にて経験せし事を互いに相告ぐるは、文明なる国の諸民におもて甚た大なる利益となる」だろうと。コレラの治療にあたった日欧の医師を一堂に集め、その知見を共有しようという、医学上の国際協力の動きがあったのである(『続通信全覧』編年之部四「仏国往復書翰」五)。

この申し出について老中からの下問を受けた外国奉行は、「御国(日本)おみて痧病の流行仕り候は近來の事にて、治療おるても未だ十分に相開け申さず」と、コレラの治療法が解明されていない実態を認める。

そして、「蘭家医師の内西三人人物相撰び神奈川表(横浜)へ差し遣わされ、外国医師の内右病症治療工(巧)者のものへ質問仕らせ候ハ、方術相開け治療も行き届き申すべく」と、外国の医者から治療に関する情報を得ることについて賛同した。

この結果、奥医師の伊東貞齋と、同松本良甫の惣領・松本良順の横浜派遣が決まった(「村垣範正日記」八月二七日付、「大日本維新史料稿本」東京大学史料編纂所蔵)。同門の伊東朴齋が「都下一般摩痘病(麻疹)引き続きコレラ病流行にて昼夜奔走致し居り候」(九月一四日付、「関東医門門倉玄春書状」門倉保茂家文書、当館複製本)と書くよう

に、日本の医師たちも多忙を極めていたさなかのことである。

生麦事件とコレラ

ところで、幕末史上有名な生麦事件が発生したのは、この感染症が流行している最中のことであった。八月二一日、東海道を西に向かう鳥津久光(薩摩藩主の父)の行列と交錯したイギリス人が、生麦村において薩摩藩士によって殺害された。横浜の外国居留民は事件の報を聞いて激昂、すぐさま行列に報復攻撃をかけることをニールに迫る。翌年イギリス艦隊は鹿児島を砲撃、その後の幕末の政局に大きい影響をあたえることになったのは周知のこと。生麦事件の歴史的意義の大きさは言うまでもない。

ところが、フランスス・ホールは事件の一週間後の八月二八日(西暦九月二一日)に次のように書いているのである。「先日の東海道における暴行・殺人による興奮はやわらいでいる。コレラの蔓延によって、一般の人々にとって事件は印象が薄くなってきた」と。感染症のさなかに生きる人々にとって、まずは目前に迫る病とその拡大が不安でたまらなかつたのであろう。文久二年の人々のこういった実感を、私たちは今、容易に想像できるように思う。
*本稿の日付は原則として和暦(太陰暦)で表示した。

(吉崎雅規)

3人のコスモポリタン二世たち —「コスモポリタンたちの足跡」展に向けて

今年度最初の企画展「コスモポリタンたちの足跡—写真アルバムから—」展はコロナ禍のため延期となり、来る一〇月三日から第二回企画展として開催予定である。

この展示でも取り上げるのは、当館が所蔵・保管する横浜ゆかりの欧米外国人旧蔵の個人アルバムであり、多くが家族アルバムである。当館では約二〇〇冊の写真アルバムを所蔵・保管している。多くは外国人向けのお土産として販売されていたものである。幕末の写真家、ベアトが撮影した生麦事件の現場をはじめとする歴史的場所や、日本人町と外国人居留地が併存する開港場、横浜の街並み、あるいは当時の日本人の風俗などをとらえた写真は、歴史資料として展示や出版で活用してきた。

しかし、今回の展示で紹介するのは、これまであまり取り上げてこなかった個人アルバムや家族アルバムである。もちろん、当時のようすを今日に伝える歴史資料にはちがいないが、多くは、欧米居留外国人の生活をとらえた私的な写真であり、活用する機会は少なかった。

本稿では、展示予定の写真アルバムのなかから三人のコスモポリタン二世を紹介したい。三人はいずれも、幕末・明治の横浜（日本）に暮

らした欧米外国人を父親にもつ。横浜にはこのような親子が少なくなかった。

サムエル・ヘボン

(一八四四〜一九三三)

サムエル (Samuel Hepburn) の父親は、アメリカ人宣教師、J・C・ヘボン（一八一五〜一九一一）である。開港間もない一八五九年、夫妻で来浜し、医療活動を通じてキリスト教の布教をおこなった。日本初の和英辞書『和英語林集成』の編纂や、今日、最も普及している（ヘボン式）ローマ字の考案者として知られる。また指路教会（横浜市中区）や明治学院の創立等にも関わり、約三〇年という長きに亘って日本で活躍した。引退後はアメリカに帰国し、九六歳で亡くなった。

サムエルはヘボン夫妻の次男として夫妻の伝道先である中国のアモイで生まれた。他の四人の子ども（男子）は夭折し、成人したのはサムエルだけであった。夫妻は日本行きにあたり、一五歳のサムエルをアメリカの知人に預けた。夫妻がアメリカ



写真1 「サトウ旧蔵写真アルバム」のなかのヘボン（60歳代後半） 1882年



写真2 長崎時代のサムエル夫妻（後列左右）と友人たち 横浜プロテスタント史研究会寄託・当館保管「サムエル・ヘボン旧蔵アルバム」より

ス人貿易商だった。二年間の上海生活の後、一八六三年にイギリスの大手商社、デント商会の代理人として横浜に移り住んだ。その後、独立しておもに生糸輸出業にたずさわる一方、居留民の自治組織に積極的に参加したり、スポーツマンとしてとくに競馬で活躍するなど外国人社会の主要メンバーとなった。一時、ポルトガル代理領事も務めた。

の弟に宛てた手紙には、残してきたサムエルを案じる心情がこぼれている。サムエルは一八六五年、二一歳の時に横浜の両親の元にやって来て、日本郵船やスタンダード石油に勤めた。父親とはちがって、会社員となったサムエルは、余暇に横浜在住の欧米外国人仲間と野球やボートといったスポーツに親しむ生活を送った。両親よりも長く日本に暮らし、引退後はアメリカに帰国した。

キング・キク・キングドン

(一八六六〜一九〇二)

キング (King Kiku Kingdon) の父親、ニコラス・P・キングドン（一八二九〜一九〇三）は、早くからメキシコや中国に雄飛したイギリ

浮世絵師歌川国鶴の娘ムラと結婚し、四人の子どもをもうけたが、その長男がキングであった。写真3は、一八九七年に盛大に催されたヴィクトリア女王即位六〇周年祭の時に友人、レナード・イートンと撮った写真（着色）である。赤穂浪士に扮して日本人と一緒に自転車パレードに参加した。レナードも父親はイギリス人、母親は日本人だった。

キングは一八六六年に横浜で生まれ、一五歳の時（八一年）、父親の母国、イギリスに留学し、約一〇年間、イギリス生活を送った。マールボロ次いでキングス・カレッジに学んで土木技師となったキングは、卒業後、ロンドンやマンチェスターで

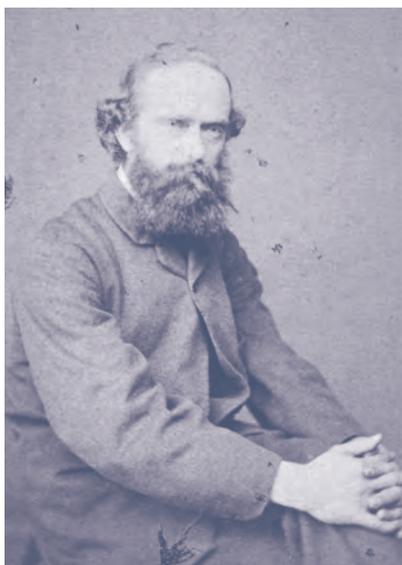


写真4 キングの父親、N.P.キングドン(30歳台) デーヴィッド・エヴァンス氏寄贈[J.C.フレイザー旧蔵写真帳]より



写真3 ヴィクトリア女王即位60周年祭に参加した31歳のキング(左)と、友人のレナード・イートン(右) 1897年 [外国人個人アルバム]より

そのキャリアを積んだが、横浜に戻ると父親の後を継いで商人となった(『ジャパン・ウィークリー・メイクル』一九〇一年八月一七日号のキングの追悼記事)。

写真3からは帰国後の充実した生活がうかがえる。父親のニコラスはイギリスの長兄に宛てた一八九三年の手紙で、「キングは事務所で一生懸命働いていて、今までのパートナーよりも助けになります。頭脳が明晰で物事に熱心な興味を示します」と書いている(歌川隆翻訳)

「N・P・キングドン書簡(日本在住時)」「横浜開港資料館紀要」一四号)。しかし、キングは一九〇一年、三四歳という若さで急逝した。事務所は弟のアーサーが継いだ。期待をかけていた長男を失った痛手に因るものか、ニコラスも二年後の一九〇三年に没した。

武田久吉(一八八三〜一九七二)

久吉(ひさよし)の父親、イギリス外交官のアーネスト・サトウ(一八四三〜一九二九)は上海と北京で約七か月間の中国語学習の後、一八六二年九月、日本語通訳生として横浜に到着した。来浜間もなく、生麦事件がおき、また関内地区を焼き尽くした六六年の慶応の大火にも遭っている。

久吉は、このサトウと武田兼(かね)の次男として東京に生まれた。長女は夭折し、久吉の三歳上に長男、栄太郎がいた。栄太郎と久吉はサトウの勤めでイギリスに留学した。栄太郎は一九〇〇年に渡英したが、結核を患って療養のため渡ったアメリカで暮らすようになり、アメリカ人女性と結婚して、一度も日本に戻るこ



写真5 来日前のサトウ(18歳) 「サトウ旧蔵写真アルバム」より

となく、二六六年に現地で亡くなった。

久吉は、二七歳の一九一〇年から一六年までイギリスに留学して植物学を学び、帰国後は北海道帝国大学などで植物学を教え、植物学や民俗学の研究書を著した。また、市河三喜(英語学者)や牧野富太郎(植物学者)、柳田国男(民俗学者)といった人びとも早くから交流をもった。父、サトウと同じように植物や登山を好み、日本山岳会の創立メンバーのひとりとなり、尾瀬の自然保護に尽力したことも知られる。

兼は終生、海外に出ることはなかった。海外赴任中の、引退後はイギリスに帰国したサトウと、そして海外にいる息子たちと手紙で近況を伝え合った。兼の手に残ったサトウたちからの手紙は家族の記録であり、写真アルバムなどとともに震災や戦災をくぐり抜けて武田家に残り、今日、武田家旧蔵資料として当館の収蔵庫に納まっている。



写真6 イギリス留学中の久吉(30歳前後) 辻村伊助撮影「武田家旧蔵アーネスト・サトウ関係資料」より

かれらを「二世」としたのは、来浜した父親世代を初代とみなしたからだが、ヘボン家とサトウ家はコスモポリタンな先祖をもつ家系であった。ヘボンの祖先はスコットランドからアイルランドへ、さらに一八世紀後半にアメリカに渡った。サトウの祖先は北ドイツが出身地で、サトウの父親はラトヴィアからイギリスに移って来た。

状況が許せば、ぜひ一〇月開催予定の展示会場に足を運んでいただきたい。コロナ禍によってコスモポリタンを支えてきたグローバル化の流れに制限が加えられつつある今日、開港都市、横浜にゆかりのあるコスモポリタンたちそれぞれの歴史は、私たちに何かを語りかけてくるにちがいない。

(中武香奈美)

横浜市庁舎の震災復興

一九二三（大正一二）年九月一日に発生した関東大震災は、横浜市に壊滅的な打撃を与え、市政の中心地であった港町（現・中区）の横浜市庁舎も火災によって失われた。その後、建物から避難した助役以下の職員たちは一時的に横浜公園に移動、さらに三日午前には桜木町駅前の中央職業紹介所に移って災害対応の業務を開始した。横浜市役所市史編纂係編・発行『横浜市震災誌 第一冊』は「斯くて桜木町は救護事務局支部、県庁、市役所三庁舎の設置に因って自から県市救護事務の中心地となつたと同時に、又県市行政事務の中枢地ともなつた次第で、慰問の諸名士、関係諸員が来て、車馬の往復昼夜絶えず、其の光景は戦地に於ける司令部の観があった」と記している。

この経緯については、第一四七号の企画展示紹介「町会所から市役所へ」のほか、今井清一『横浜の関東大震災』（有隣堂、二〇〇七年）や拙稿「関東大震災と横浜市役所」（『市史通信』第五号、二〇〇九年七月）が詳しくまとめている。しかしながら、三代目市庁舎となった中央職業紹介所から港町に再建された四代目市庁舎へ移行する過程は必ずしも明らかになっていない。そこで今回は、『横浜市震災誌』や『横浜復興誌』、さらに『横浜市日報』や『横浜市報』、『横浜市事務報告書』、『横浜貿易新報』や『都新聞』、『東京日日新聞』などの新聞史料から四代目市庁舎が誕生する経緯をたどってみたい。

応急体制の確立

地震発生前、横浜市役所の機構は内記課、庶務課、教育課、商工課、社会課、建築課、土木課、衛生課、戸籍課、税務課、経理課、会計課、都市計画局、電気局、水道瓦斯局の一二課三局体制であったが、この体制では増加する震災業務に対応できなかったため、九月四日、配給係や徴発係など三三の係に改編された。このうち救護物資の配給、給水、揚陸、収容、衛生、保護等の活動については『横浜市震災誌 第四冊』にまとめられている。

市役所に求められたのは、窮地に陥った市民の救済であり、『横浜市震災誌 第一冊』は「直後最も必要な仕事は、罹災生存者を飢渴から救ふこと、傷病者の救護と、人心の安定を図る事にあるので、乃ち先づ此等の事に主力を注ぎ、無電・急使等により、政府筋に急ぎ申告して其の援助を請ひ、物資豊富な関西の諸府県市に向つて、米穀、副食物、衛生材料、その他応急物資の供給を依頼するの一方、取敢えず市内の残存地域其の他近接町村に吏員を急派して、食糧の蒐集に努め、残存倉庫及停泊船舶の在米を配給するの準備を為し、飲用水を供給するの途を開き、又救護所を開設するなど、迅速機敏の方途を講じた」と、震災時の対応を振り返っている。市役所の職員たちが様々な業務に追われている様子がうかがえる。

他方、事務作業は瀧頭に所在する電気局（市電の運行を担当）以外は前述の中央職業紹介所で行われた。

また、市役所は九月一二日発刊の『横浜市日報』に「急告」を掲載、「市吏員其の他にして今尚出勤せざる者は至急桜木町二ノ二中央職業紹介所内市役所仮事務所に出頭し其居所を届出で関係課長の指揮を受けらるべし」と求めている。事務体制が整う一方で、混乱状況のなか、所在確認ができない職員もいたのである。同様の「急告」は九月一七日にも掲載され、一九日までに書面で状況を報告しなければならなかった。

バラック庁舎の建設

地震発生から半月を経過した段階で、災害対応にあたる職員の勤務時間、土曜日・祭日も含め、午前八時から午後五時となった（『横浜市日報』九月一八日）。一方、中央職業紹介所では、建物が狭隘ゆえに、事務作業の空間が問題となっていた。そこで庁舎前、桜木町駅の駅前広場にバラックを建設することでこの問題の解消に努めた。九月二日以降、バラックの完成に伴い、戸籍係や配給係などの一部の部署をそこに移し、中央職業紹介所内の配置を再編した（『横浜市日報』九月二日）。さらに翌二二日夕方、中央職業紹介所内で局課長会議が開催され、今後の活動方針や予算、復興に



図1 三代目の市庁舎となった中央職業紹介所 当館蔵



図2 旧市庁舎跡地に完成した四代目市庁舎 当館蔵

むけた計画などが話し合われた。

この時点で県庁とともに、市庁舎を横浜公園内に設置する計画があったようである。九月二二日付の『都新聞』は「焼け出された神奈川県庁と横浜市役所は今度一緒に横浜公園に半永久的のバラック式建物を建設し、当分そこで事務を執ることに決し、今月末か来月初めより建築に着手することになった。同時に県庁の吏員で焼出された者又は焼けなくても多忙で家へ帰れない者のために同

じ公園内にバラック式の合宿所を設けようと計画を進めて居る」と報じ、

「当分は公園が神奈川県並に横浜市の政治の中心となる訳である」としている。しかし、理由は定かではないが、この計画は実現せず、引き続き、桜木町が市政の中心地となった。

九月三〇日、臨時配給部や臨時建築部を新設すると同時に、臨時に設けられた係を廃止、事務体制は震災前の状況に復帰した。ただし、各局課は処務規定を定めて引き続き災害

対応を行ったほか、情報収集及び被害状況の調査は社会課が担うことになった（『横浜日日報』

一〇月一日、二日）。続いて一

〇月二四日、中央職業紹介所と神奈川農工銀行との間の空地にバラックが完成、市長室をはじめ内記課や庶務課、経理課などが移転する一方、中央職業紹介所は本来の業務を再開させたほか、建物内には、社会課や都市計画局、市会議場などが残り、業務を続けた。

市役所の災害対応は復旧から復興の段階へと移り、都市計画局を中心に、様々な計画が練られていった。それに伴い業務量も増加、横浜市は桜木町駅前郵便局の仮庁舎を確保するなど、事務作業の空間を拡大させた。このように震災時の市庁舎は、中央職業紹介所を中心に、桜木町駅前など周囲に拡大していったのである。

横浜市庁舎の再建

内務省の技師であった牧彦七が策定した横浜市の震災復興計画では、伊勢山に公園を新設するとともに、周辺部に県庁や市役所を配置、関内方面と戸部・高島町方面を繋ぐ行政の中心地とする構想だった（『横浜復興誌 第一編』）。だが、市内有力者たちの反対で計画は変更、市庁舎は港町の元の所在地に再建されることになる。この時、すでに焼けた旧庁舎は陸軍の工兵隊によつて爆破されており、再建工事ではその基礎部分を再利用することになった。

一九二四（大正一三）年一〇月一日、新庁舎の建設工事が始まったほか、一週間前、三日付の『横浜貿易新報』は「早速工事に掛る市の仮庁舎」と題して新庁舎の概要を報じている。「仮庁舎」とあるように、新庁舎はあくまで仮設の建物として想定されていたが、「該建築の体裁は木造二階建外面を玄関一部を除いて全部をセメント塗りとするかなり立派なもの」であった。

そして工事開始から四ヶ月後の一九二五年二月七日、木造二階建て、石綿スレート葺の新庁舎が完成する。建物は本庁舎と別館から構成され、前者の一階には財務課や会計課、社会課等の各課、二階には市長室や助役室、新聞記者室、市会議場、食堂などが設けられた。また、後者は土木局専用の建物で、同局道路課や庶務課が一階と二階に分散配置され

た。加えて、道を隔てた横浜公園内にも二階建ての分庁舎が建設され、土木局整地課、河港課のほか、建築課や衛生課が入るなど、再び港町周辺が市政の中心地となったのである。

当初、桜木町からの引越作業は二月八日を予定していたが、悪天候のために延期となり、一五日の日曜日に作業を完了させた。これに伴い、渡辺勝三郎市長は前日発行の『横浜市報』号外で「市役庁舎ハ本月十六日ヨリ左ノ所へ移転ス」と告示を發し、「港町一丁目一番地 旧庁舎跡」、「山下町横浜公園地 港橋際」と新庁舎の位置を明示した。一方、桜木町のバラックについては無償提供の要請が殺到したが、引き続き、水道瓦斯局などが使用した後、交通上の問題から撤去されていった。

二月二一日、市内外の有力者約五〇〇人を招待して新庁舎の披露式典が催された。会場となった庁舎内では、震災当時の写真や復興に関する資料が展示されたほか、ビールや軽食なども振舞われた。また、渡辺市長は工事を請け負った三ツ引商事株式会社及び設計者の庄司保之助に賞状を送るなど、その労をねぎらっている（『東京日日新聞（横浜横須賀版）一九二五年二月二二日』）。以後、この庁舎は一九四四（昭和一九）年一〇月一日に横浜市役所が野毛山の老松国民学校に移転するまで使用されていった。

（吉田律人）

横浜貿易新報社屋をめぐるって



図 横浜貿易新報社新築記念絵はがき
(横浜開港資料館所蔵)

桜木町駅から大岡川をのぞんだ対岸に、かつて横浜貿易新報社が建てていた。現在は横浜市新市庁舎が建つ。同紙は、今年創刊二二〇年の「神奈川新聞」につながる一紙である。

一九二二（大正一一）年当時、最新の技術である鉄筋コンクリート・鉄筋ブロック四階建てであった。新築当時の紙面は、落成式と披露招待会の話題を賑やかに伝えている。三月一日の落成式後、一〇年以上勤続社員二七名の表彰を行なった。同三日・四日には県市の代表者、銀行関係者、営業関係者などの披露招待会を開催した。同時に、開港記念会館に八団体八百名の児童を招待し、慈善団体児童慰安会を開いた。

同紙が一八九〇（明治二三）年二月に、横浜貿易商組合の機関紙「横浜貿易新聞」として創刊して三四年目のことであった。この間、実業紙から一般紙を目指し、一九〇四年に『横浜新報』と合併して同社の社屋（本

町六丁目八六番）に移った。一九〇六年に『横浜貿易新報』と改題する。一九一〇年には三宅磐を社長に招き、最盛期を迎えた。

新社屋（本町六丁目八四番）への移転は、三宅の社長就任後、一三年目だった。この時、①大学講座の開設、②婦人輔導の施設、③体育連盟の組織、④移動会館の計画、⑤横浜年鑑の発行という「五大事業」計画を示した。ところが九月一日に関東大震災が発生した。半年前に移転したばかりの社屋は倒壊し、「五大事業」計画は実行に移せなくなった。

震災当日、出社した記者の山本和久三は、二階で連載中の原稿を仕上げていた。土曜日のため、隣の社長室に来客があるほか、編集室には社員三人と給仕が二三人いるのみだった。その時地震があり、南側の窓に、銀行集会所の建物が平蜘蛛の如くにベシヤンコになったのが見えた。山本は、社屋の一部が地面近くまで倒れていた場所から、飛び降りた。耐震耐火といわれた社屋は、左に傾いていた。しかし、社員も従業員も全部無事に屋外に逃れ得たのは矢張り建物のおかげだったという。

同社は、九月一三日から臨時号を発行し、翌年一月二六日に復刊を始めた。一九二七年には、本町通りに面した旧社屋の場所に社屋を新築するまでに復興した。

ミニ展示コーナーで、八月三〇日まで、横浜貿易新報社関係資料を紹介する。
(上田由美)

▼お知らせ

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2020年2月29日(土)から臨時休館しておりましたが、緊急事態宣言の解除を受けて、6月2日(火)より段階的に再開館いたしました。再開にあたっては、感染拡大防止の観点から、十分な予防対策を行ってまいります。皆さまにはご不便をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

—再開にあたって—

- ・当面、開館時間は10時から16時とします。
- ・展示室内が密にならないよう、入館する人数を制限して、1時間ごとの入れ替え制でご入館いただきます。
- ・受付にて1時間ごとの整理券を配布します。
- ・手に触れられる一部の展示は休止します。
- ・当面、閲覧室は休室します。

—ご来館の皆さまへのお願い—

- ・体調のすぐれない方、過去2週間以内に感染が引き続き拡大している国・地域への訪問歴がある方は、ご来館をお控えください。
- ・ご入館の際に、検温とアルコール消毒液での手指消毒をお願いします。37.5℃以上の発熱があると認められた場合、ご入館をお断りいたします。
- ・ご入館の際に「連絡シート」へのご記入をお願いします。(当館ホームページからダウンロードできます。あらかじめご

資料館 だよ

記入のうえ、お持ちいただいても結構です。

- ・館内ではマスクの着用をお願いします。
- ・館内では2mを目安に、他の方との間隔を保ってください。また大きな声での会話はお控えください。
- ・館内では展示物や展示ケース等に触れないようお願いします。
- ・ご観覧は1時間以内でお願いします。
- ・当面、団体でのご来館はお控えください。

—当館での取り組み—

- ・適切な展示環境を維持するため、館内は普段から十分な換気を行っています。
- ・手すりなど多くの方が触れられる箇所は、毎日定期的に消毒を実施しています。
- ・受付には、飛沫感染を予防するため飛沫ガードを設置しています。
- ・スタッフは毎朝の検温、マスクの着用、手指のアルコール消毒を実施しています。
- ・配置により、ビニール手袋、フェイスガードを着用して対応いたします。

▼企画展

- (1) 横浜市新市庁舎完成記念
町会所から市役所へ
—古地図と古写真に見る横浜の歩み—
会期：2020年6月13日(土)
～9月22日(火・祝)

今年、横浜市中区本町6丁目に横浜市の新しい庁舎が完成しました。これを記念して、開港直後に町の行政機関として設置された町会所の歴史や1889年に発足した横浜市の現在に至る歩みを古地図や古写真等で紹介します。

本展示は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため2月29日(土)以降臨時休館により休止した展示を再開するものです。

*この期間に予定しておりました企画展「日英交流の原点」(仮称)は、来年度へ延期することになりました。

- (2) コスモポリタンたちの足跡
—写真アルバムから—

会期：2020年10月3日(土)
～2021年1月24日(日)
本展示の会期は、当初4月25日(土)～7月12日(日)としておりましたが、臨時休館を実施したことにより会期を変更して開催いたします。

今後の状況により、開館日や開催内容等を変更する場合がございます。最新情報は、当館ホームページ(<http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>)にてご確認ください。